高病原性鳥インフルエンザ防疫演習の今後の課題

紀北家畜保健衛生所
○藤原　美華　小松　広幸　松井　望

（背景）

近年、高病原性鳥インフルエンザ（以下 HPAI）は、各国で急速に拡大している。本年度においては、４月、１０月に隣国の韓国で発生、また、本国においても４月から５月にかけ、青森県、秋田県の十和田湖畔、北海道野付半島で、死亡ハクチョウから強毒株である H5N1 型が分離された事からも渡り鳥による国内進入が考えられ、国内、しいては県内での発生が危惧されている。

HPAI の発生は、養鶏業界に多大な経済的損失を与えるだけでなく、新型インフルエンザへの変異も懸念されるため、防疫体制をさらに整え、感染拡大、被害を最小限に食い止める事が重要となる。

（方法）

本件では、県関係機関、振興局、市町、関係団体等が参加し、平成 18 年より毎年、防疫演習を行ってきた。本年 10 月に行われた防疫演習では、200 名余りの参加があり、年々参加者が増加傾向にある。　（表１）

また今回は市町の積極的な協力の下、県と市町が中心となり行なわれるという大きな進歩があった。

この演習は、一連の防疫活動の理解と習得や各分野の分担を明確にする事、さらには関係者との具体的な協力体制を再確認する事で、防疫活動の充実強化と意識の高揚を目的とし、実施。開催は、県内最大の養鶏場を有する K 町で行ない、今後の防疫演習の課題点を検討するため、演習後、参加者に対しアンケート調査を実施した。

今回の演習を行うにあたり、より参加者が理解とイメージがしやすいよう、前年の演習の教訓より、演習そのものを、防疫活動の一連の流れに沿った形に変更、更に、デモンストレーションだけのものから実践体験形式を取るなど改善を施し、実際、 参加者に防護服を着てもらうところから始め、一連の防疫活動を体験してもらうという形式で行った。（写真１～６）

（結果）

今回の防疫活動・消毒ポイント設置運営訓練に対する参加者のアンケート調査結果では、61%が十分理解・習得できた、39%がどちらかといえば理解習得できたと回答している事から、参加者のほとんどが理解できたと考えられる。また、前年度と比較してみると、明らかに今回は十分理解・習得できた参加者が増えているといえる。（図１）

次に、過去の演習参加状況でわけたグラフから、参加回数が増えると参加者の理解度も明らかに上昇している事が読みとれる。（図２）

更に、今後もこのような演習が必要かというアンケート調査の結果では、98%が必要と思うと回答していることから、参加者の危機管理に対する意識の向上が見受けられる。（図３）

参加者から得られた感想では、「前年と異なり、実践体験ができたので、イメージがわ

きやすく、理解しやすかった」、「本格的な実践演習を農場で実施してほしい」、「このような演習を繰り返し行う事が重要である」、「さらに理解を深め、意志統一を確認するために、演習後の検討会を充実させてほしい」などの意見が得られた。
また、防護服を着て、手袋をはめて実際に行われる防疫活動がいかに難しく、大変であるかという事が推測される、という声がたくさん聞かれた。

（まとめ）

以上の防疫演習のアンケート調査結果から、参加者の理解度をあげるために実践形式の演習の継続が重要であるという結果が得られた。

演習後の検討会を充実させるための開催方法を検討する事が、来年度への改善点として考えていくべき点である。

今後の防疫演習の課題としては、養鶏農家協力のもとで、実際に鶏舎や生鶏を利用するなど、農場での実践型の演習、リアルな演習の実施を実現させる事であると考える。

（考察）

今回の防疫演習を通して、一連の実践的な体験演習の実施により、理解度が向上した事。町施設を利用した事により、町職員の積極的な参加が得られたこと。事前演習の実施により、県、市、町職員間の連携と協力体制が構築された事。などが大きな成果であったと思われる。

今後も関係機関の協力のもと、防疫演習を継続し、円滑、かつ迅速な防疫活動を行える体制を整えていく必要がある。

表1．本県における防疫演習実施状況

- H18年　伊都地方　参加者　120名
- H19年　日高地方　参加者　150名
- H20年　海草地方　参加者　200名

参加機関　県関係機関
振興局
市町
関係団体

写真1．HPAI概要講義

写真2．
感染予防演習（健康診断・防護服着脱）

写真3．防疫活動（捕鶏）

写真4．防疫活動（殺処分）

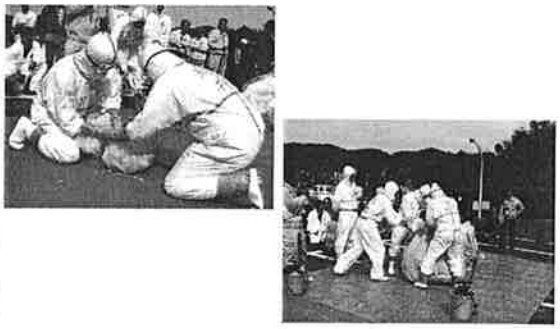

写真5．防疫演習（袋詰め）

写真6. 消毒ポイント設置及び運用訓練

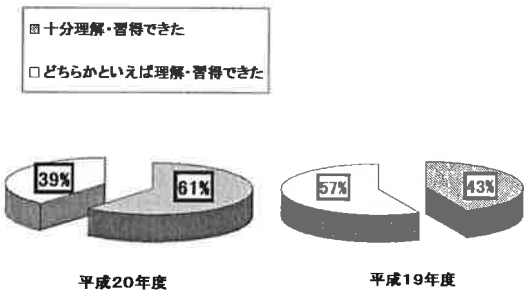

図1. 防疫活動・消毒ポイント設置運営訓練

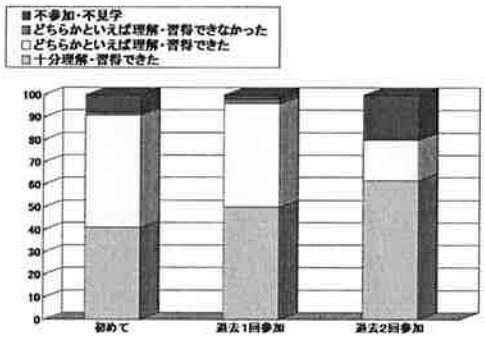

図2. 参加回数による理解度

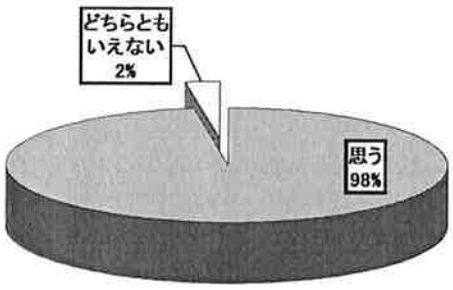

図3.今後もこのような演習・訓練は必要か